

研究課題	生徒が生き生きと活動する学校の創造
副題	～ICTを活用した「伝える・つながる」取組を通して～
キーワード	
学校/団体名	公立熊本市立五霊中学校
所在地	〒861-0135 熊本県熊本市北区植木町一木 163 番地
ホームページ	http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/j/goryoujh/

1. 研究の背景

本校は、熊本市の ICT 活用の取り組みで令和元年から一人一台タブレットを先行導入されており、タブレットを活用した教育を進めてきた。また、それに関連した職員研修も積極的に行い、生徒一人一人が生き生きと活躍できるような学校の創造を目的に取り組んできた。その取り組みは生徒会活動でのタブレットを使ったスライド作成や卒業式での動画作成など生徒主体による活動として一定のところまでは成果として表れてきている。しかし、日々の授業の中で ICT 機器の活用の効果が学力向上に関して不十分な点や本当に有効な場面で活用できているのかという疑問なども多くある。また、日常生活の中で生徒が生き生きと活動できている生徒がいる中で、逆に自分の力を発揮できずに生き生きと活動できていない生徒や不登校生徒がいるのも現状である。その原因は様々考えられるが、ICT 機器を有効に活用することで生徒がもっと活躍する場が増え、その結果生徒が自己肯定感を高めていき、生き生きとした学校生活を送ることができるのではないかと考え、そのためのツールを用意し、場の設定を行うこととした。

2. 研究の目的

現在教育現場では主体的・能動的な学びを通して生徒の自主性・自立性を育成することを主とした教育を目指している。本校でもその考えを主軸として、生徒が元気に生き生きと学校生活を送ることができることを目標としている。そのためには、学校生活の中心である授業を、能動的な学びへと改革する必要がある。授業の中で、ICT を効果的に活用した協働学習や学び合い（伝える・つながる場面）を積極的に取り入れることを通して、能動的な学びにつなげていきたい。そして、授業以外でも各行事や日常生活で生徒が主体となる場面を設定し、ICT を活用しながら生徒一人一人が様々な場面で活躍して行けるようにする。そうすることで生徒一人一人が自信をもって学校生活を送ることができるようになることを目指している。また、本校では、不登校や別室登校など心の悩みを持つ生徒も多く、それらの生徒が元気に生き生きと学習や生活をするためには、学校の魅力を高め、学校を楽しく安心できる場所だと感じてもらう必要がある。そのためには授業だけでなく学校行事や特別活動、生徒会活動などでも ICT を積極的に活用し、「伝える・つながる」取り組みを行い、生徒たちが生き生きと活躍できるようにする。また、ICT の活用を通して、生徒と生徒、生徒と学校、生徒と教師をつなぐことができるという良さも活かし、全ての生徒が安心して生活できる環境も整えていきたい。

3. 研究の経過

研究推進委員会を中心に3部会（授業研究部、環境教育部、日常生活部）に分かれ、それぞれの視点から研究を進めるとともに、年3回の研究授業を行い、全職員が参観し授業改善に努めた。また、学校行事を生徒主体で行うようにし、生徒たち一人一人の自己肯定感を高めるように取り組んだ。

- 4月 ○研究テーマ設定、ICTを活用した学校行事（学校・委員会・部活動紹介）
- 5月 ○体育大会（生徒主体による運営）
- 7月 ○数学科研究授業（外部から講師招聘 全職員による参観 生徒による授業研究）
- 8月 ○特別支援教育に関する校内研修（外部から講師招聘）
- 9月 ○大型テレビ設置（掲示板）
○特別支援教育研究授業（外部から講師招聘、全職員による参観）
- 10月 ○合唱コンクール（スピーカーを活用したパート練習）
- 11月 ○道徳研究授業（植木地区の小中学校の先生による参観）
- 12月 ○走歩会
- 1月 ○研究のまとめ

4. 代表的な実践

（1）授業実践における具体的な取り組み

①ICTを活用した話し合い活動の取り組み

授業実践では、「ICTを活用した学習活動、話し合い活動」を意識した研究を進めた。

数学科では中学2年生の連立方程式の利用という単元での「さっさだて」の授業を行い、「スクラッチ」というプログラミングアプリを使用した。今まではおはじきを使って、その個数を当てるゲームを行っていたが、アプリを使用して行った。生徒たちは2人一組でこのゲームをやりながら（図1）「2個」と「1個」に分けた回数でそれぞれが何個になるのかの計算式を求めようとお互いに意見交換を行っていた。



図1 スクラッチを使った意見交換

②不登校生と教室をつなぐ取り組み

授業実践と並行して行ったのが、「ICTを活用した別室登校や不登校生徒と教室の生徒とのつながりを持つ」ための取り組みである。そのためにスピーカーフォンを各教室に一台ずつ導入した。これを使うことで今まで教師側の声が聞き取りにくかった部分をクリアにし、遠隔授業を受ける生徒がより授業に集中しやすいよ

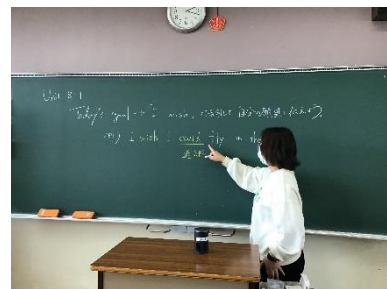


図2 授業の様子

うにした。(図2)また、今までグループでの話し合い活動などになった場合は音声聞き取りにくく、話し合い活動に参加できなかったことが多くあったが、360度集音性スピーカーフォンを使うことによって、話し合い活動にも参加しやすくなった。

③生徒参加型の授業研究

今まで研究授業を行う際に教師のみが参観していたが、その場に各学級の総務委員を参加させることで授業の内容ではなく、生徒たちの授業の受け方について生徒目線で考えさせた。

(図3)その日のうちに話し合いを持ち自分たちの学級で生かせそうな点を出し合い、次の日に学級に伝えた。



図3 総務による話し合いの様子

(2) 生徒主体による様々な具体的な取り組み

①生徒主体による体育大会

体育大会の準備や当日の係だけでなく、全体への指示や計画まで体育委員長を中心に生徒が考え行った。体育大会予行後の振り返りも教師のみで行わず、各委員長も参加し反省点を出し合った。(図4)また、プログラム内のダンスは曲の選定から振り付けまで3年生のダンスリーダーが決め、その指導も各団で生徒主体で行った。



図4 生徒と職員が反省点を確認の様子

②総務委員による授業態度改善の取り組み

本校では数年前より授業態度の改善に向けて取り組みを行ってきた。その中で教師だけではなく生徒とともに協力して行う JTL (授業態度レベルアップ) というのを行っている。これは毎授業ごとに決められた項目をできていたかどうかを担当の教師がチェックし、その日の合計を次の日のお昼の放送で、週の合計を翌週のお昼の放送で全校生徒に伝えていくという取り組みである。各位学級ごとに総務委員が項目を見直し、自分の学級のどこがよくなかったのかを振り返り、次の日に生かしていくようにしている。チェック用紙では Metamoji を使用し、データにすることでタブレットから教師がいつでも確認できるようにした。(図5) また、本年度は総務委員長からの提案でチェック項目を各曜日で変えることで学級の課題点をより分かりやすくし、生徒会と連携しクラスマッチ形式で取り組むことにした。(図6)

授業態度レベルアップ (JTL) 週間

日	項目	達成率	備考
月	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		
火	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		
水	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		
木	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		
金	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		
土	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		
日	授業態度レベルアップ (JTL) 週間		

図5 JTLの用紙

JTL クラスマッチ

学年	月	火	水	木	金	合計
3-1	52	79	73			204
3-2	51	97	72	71	116	497
3-3	54	59	75			188
2-1	77	77	57	57	114	378
2-2	57	77	74	72		280
2-3	57	57	57	57		228
1-1	57	57	57	57		228
1-2	75	97	87	77	114	439
1-3	55	77	57	57	114	307
1-4	57	40	72	57	114	238

図6 JTLクラスマッチ

②大型テレビを用いた連絡版の活用

今年度は昇降口に大型テレビを設置し、タブレットとミラーリングをすることで掲示板としての活用を行った。(図7) 生徒たちがその日に何があるのか、何をすればよいのかを登校時に確認できるようにした。掲示のイラストやレイアウトなどは生徒会書記が考え、朝の掲示についても職員が行わず、生徒が片付けまで行った。また、各委員会が作成したものや先生方からの連絡やお知らせなども掲示するようにした。

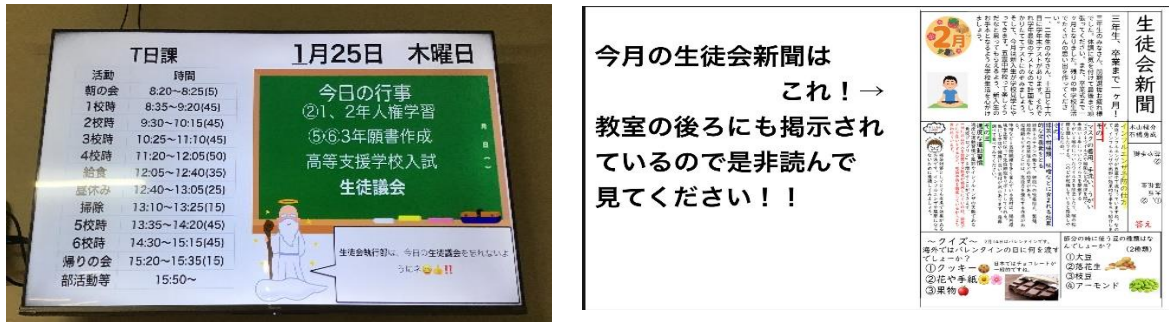


図7 掲示板使用の様子

(3) 職員研修に関する取り組み

①先進校視察による学び

今年度は先進校視察として2人の職員を他県の学校に派遣した。愛媛大学教育学部附属中学校では、「未来を拓く人材の育成」をテーマに研究を進められており、特に「AARサイクル」をいうものを重点的に意識されていた。「AARサイクル」とは、「Anticipation(見通し)・Action(行動)・Reflection(振り返り)」の略称で、生徒たちが主体的に課題を目標や計画、学習課題を設定し、論理的な思考力や表現力を発揮しながら授業を展開することで、生徒たちが自身の成長段階や変容を自覚することができるようにすることを意識されていた。広島県算数・数学教育研究会では、学習用アプリ「ロイロノート」による授業が行われていた。生徒たちへのヒントカードをデータ上で送ったり、生徒たちが困っているということを教員に送ったりするなどタブレットを活用することで、できる新たな可能性を視察することができた。これらの視察を通して得た学びを特定の職員だけでなく、職員研修として本校のすべての職員に復講した。(図8)

学力の向上に向けて

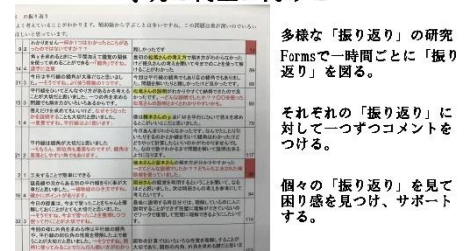


図8 復講の様子

5. 研究の成果

研究の成果を、本研究の目的別に振り返る。

(1) 協働学習や学び合いを通じた能動的な学習

年2回行っている学習アンケートの結果から各学年の数値を比較してみた。その中で「自分の考えを持つことができたか」「自分の考えを人に伝えることができたか」という項目がすべての学年で「よくできた」「ほどできている」を合わせると7割を超えていた。また、ほとんどの学年で1回目よりも数値が上昇していた。これは従来の全体への言葉による発表だけでなく、ICT

を活用し、少人数のグループでの発表やロイロノートの提出箱などを活用した文字による意見発表を各授業で積極的に取り組んだことも数値が上昇した要因の一つだと考えられる。

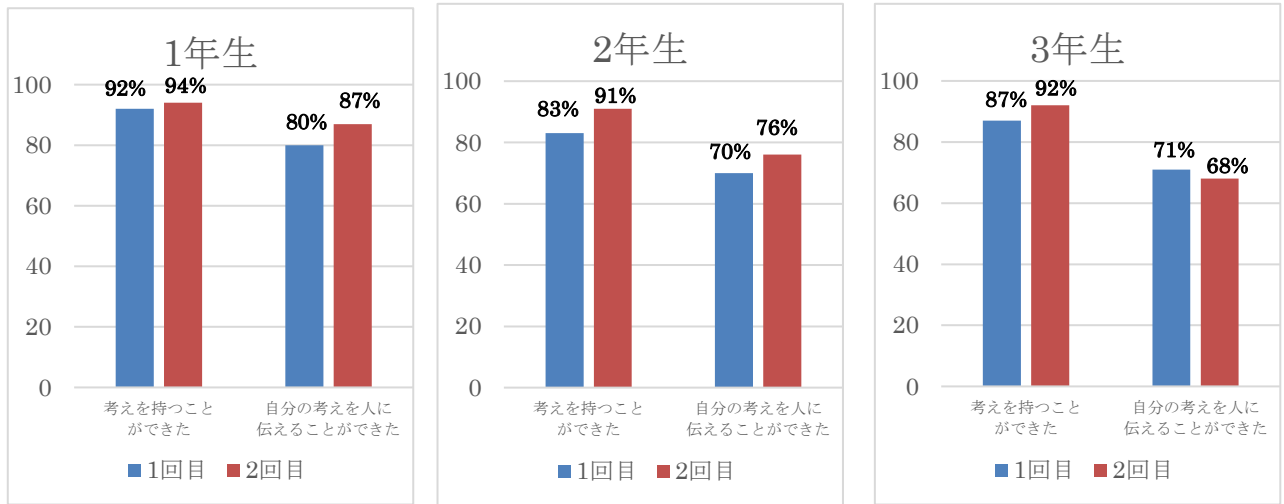


図8 生徒アンケート

そして、この成果の効果として協働学習や学び合いの必要性について生徒たち自身も感じ取っていたようである。同じアンケートの別の項目にある「人の考えを聞いて学びが深まる」と答えた生徒は1回目のアンケートよりもすべての学年において上昇した。また、学び合い時に伝えるだけでなく聞く側の姿勢として大切な「自分のしていることをやめて、相手のほうを見て聞いている」と答えた数値も上昇していた。これは本校と小学校との連携で実践してきた学習三訓を総務委員会の取り組みと絡めて行ってきたことと、生徒自身が学び合いの大切さを感じ、自主的に実践してきたためであると考えられる。

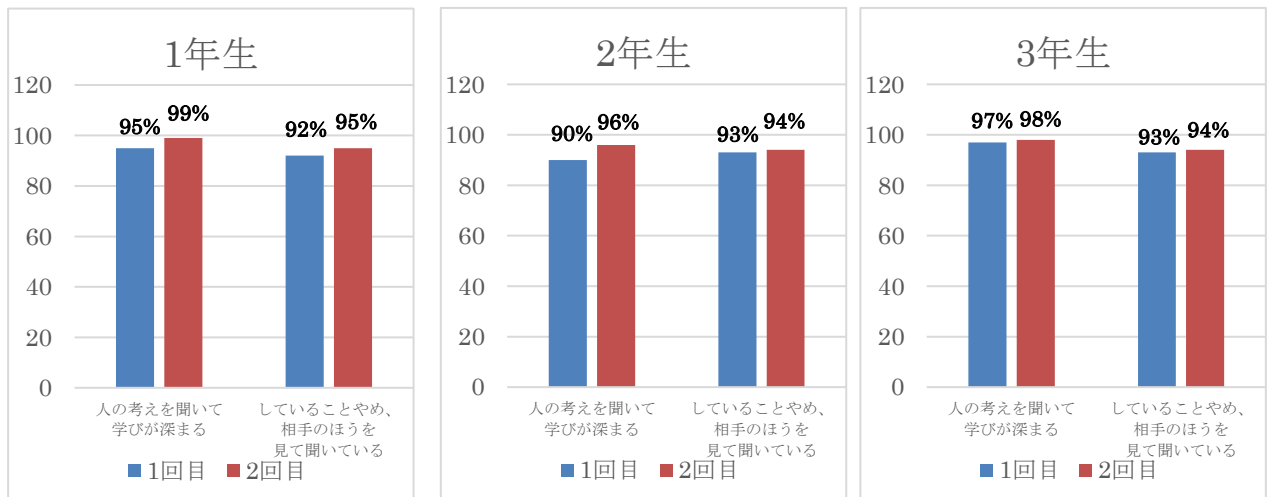


図9 生徒アンケート

(2) 生徒一人一人が活躍できる場の設定

生徒主体の取り組みや ICT を活用した様々な取り組みを行ってきたことにより、生徒たちが活躍できる場が増え、今まで特定の生徒のみが活躍していたことも多くの生徒が活躍できるようになった。各取り組み後の生徒の感想にも「掲示板の前で立ち止まってくれる人がいて嬉しかった。また、生徒会新聞や JTL の宣伝的なことができていいと思った。」「自分たちで行ったことでとてもやりがいを感じた。」など自分たちで取り組みなどを行ったことでやりがいや自信につながっていた。また、掲示板の取り組みでは「イベントの事前告知を行いたい。」「3年生の卒業までのカウントダウンを掲示したい。」など現状に満足することなく今後さらにより良いものにしていきたいという向上心もでてきた。

6. 今後の課題・展望

本研究は ICT を活用してすべての生徒が生き生きと活動できる学校を目指し取り組んだ。そのため、今までにない取り組みやあらたな ICT 機器の導入などを数多く行った。しかし、研究当初計画の見直しなどを行ったために ICT の購入時期が遅くなってしまい、十分な取り組みを行えなかった部分があった。また、不登校の減少のために別室の生徒との zoom 授業の音声をクリアにするなどの取り組みを行ったが多くの成果が得られなかった。今後は成果が上がらなかった原因や ICT 機器の活用についての研究を行い、改善につなげていきたい。

7. おわりに

本研究を通して、行事は教員が準備をして生徒は手伝うのが「当たり前」、日々の連絡は担任のみが行うのが「当たり前」という、今まで学校で行ってきた様々な「当たり前」を見直し、生徒たちに託すのも大切であると考えきっかけになった。それは生徒たちにとって「自分でしなければならないから負担」になるのではなく、生徒たちの自主的な活動や生徒の自信、意欲の向上にもつながることが分かったからである。また、教員にとっても生徒とともに取り組むことで今までとは違った視点での取り組みを考えることができるようになった。これからも、現状に満足することなく生徒とともにより良い学校の創造を目指し、研究を続けていきたい。

最後に、このような機会を与えてくださったパナソニック教育財団の皆様に、紙面を借りて深くお礼を申し上げたい。